共立女子大学家政学部紀要　第56号　(2010)

クリスチャン・ディオールのデザイン画
—1950年の創作過程を探る—

Christian Dior's design
—Investigate into his creative process in 1950—

畑　久美子，宮澤　俊惠

Kumiko HATA , Toshie MIYAZAWA

1．はじめに

クリスチャン・ディオールは、1947年2月12日、春夏パリ・コレクションにおいてデビューし、「コロール（花冠）・ライン」（図1）のドレスを発表した。このデザインは、二度の大戦により衰弱したファッション界に大きな衝撃を与えた。当時、婦人服は戦時色を帯び、外出着といえば、肩パットの入ったジャケットに布の量を抑えた短いストレート・スカートが主流となっていたが、ディオールのドレスは、ほっそりとした茎のようなウェストから大きなスカートが広がって花のようにみえる、まさに「コロール」と呼ぶにふさわしい非常に女性らしいシルエットをもつものであった。これをハーパース・バザー誌の編集長カーメル・スノウが「ニュー・ルック」と呼び、以来その名が歴史に残ることとなった。

本研究では、1950年にディオールが描いたとされるデザイン画の作品群を資料に、そこからみえる創作過程を探る。

2．クリスチャン・ディオール略歴

クリスチャン・ディオール（図2）は1905年1月21日、フランス、ノルマンディー地方のグランヴィルで生れた。父は曾祖父時代から続くフランスでも有数の肥料会社を営んでおり、裕福な家庭に育つ。幼少期に一家はパリへ移り住み、ディオールは両親の勧めで外交官になるべく政治学院へ入学したが、子供の頃から絵を描くことが好きだった彼は、芸術家の友人達との交流

図1　「ニュー・ルック」と呼ばれた「コロール・ライン」のスーツ

図2　自身のデザイン画を持つクリスチャン・ディオール、1948年撮影

表1　ディオールが発表した22のライン

年	シーズン	ライン	
1947	春夏	Corolle	花冠
1948	春夏	Zig Zag, Envol	ジグ・ザグ、翼
	秋冬	Cyclone	サイクロン
1949	春夏	Trompel'oeil	だまし絵
	秋冬	Milieu du Siecle	世紀の半ば
1950	春夏	Verticale	垂直
	秋冬	Oblique	斜め
1951	春夏	Naturelle	自然
	秋冬	Longue	ロング
1952	春夏	Sinueuse	曲線的
	秋冬	Profilee	プロフィール
1953	春夏	Tulipe	チューリップ
	秋冬	Vivante	ライブ
1954	春夏	Muguet	すずらん
	秋冬	H	
1955	春夏	A	
	秋冬	Y	
1956	春夏	Fleche	矢
	秋冬	Aimant	好み
1957	春夏	Lible	リーブル
	秋冬	Fuseau	紡錘形

※trans."Dior -Christian Dior 1905-1957-"

に勤しみ、やがてその友人達とパリに小さな画廊を開く。ディオールらの画廊で売られた作品には、ピカソ、マチス、デュフィ、ダリらのものも含まれていた。ディオールは多感な時期を20年代のパリという芸術的刺激溢れる街で過ごした。

1930年を境に、母の急死、兄の病気、父の会社の倒産と、ディオール一家に不幸が重なる。さらに彼の画廊も倒産し、彼は苦労の末病気を煩い、心配した友人達が出し合ったお金で療養したという。その後立ち直ったディオールは、生活のためにデッサンを描き新聞社などへ売って稼いでいたが、1935年からロベール・ピゲの店でデザイナーとして雇われることになった。第二次大戦でディオールは徴兵されるも敗戦後パリに戻り、1942年からルシアン・ルロンの店でデザイナーとして雇われることになる。ルロンの店には、やはり後に有名なクチュリエとなるピエール・バルマンも働いていた。ルロン自身はデザインをせず、二人の愛弟子に任せていた。ルロンの店で働きはじめて4年後、フランス繊維業界で“コットン王”として有名なマルセル・ブサックに、小さなクチュール店を立て直す仕事の話を持ちかけられるが、ディオールは自分の店を開く願望があったため断った。ディオールのまじめで良識ある風貌と出店計画の細密さに、ブサックは後援を即決し、1946年9月、ディオールはルロン店から独立していよいよ「クリスチャン・ディオール」店をスタートさせることとなった。

彼は1947年のコレクション・デビューから1957年に病死するまでの10年間で、22のラインを発表した。彼のデザインは、“ライン”と呼ばれる全身のシルエットの変化により、次々と生み出された（表1）。

3．文献にみるディオールのデザイン

ディオール店は、デビューのわずか1年後、1948年にはニューヨークにも支店を出し、52年にはロンドンに出店するなど、飛躍的に店舗を増やしていった。50年当時、ディオール店の生産量はパリのクチュール全体のおよそ半分を占めていた[i]。しかし、パリでは偉大なクチュリエであるディオールは、ニューヨークでは高級

プレタポルテのデザイナーとなった[ii]。メキシコ、キューバ、チリ、カナダでも代理販売契約を結び、52年にはアメリカ国内の委託販売店数は250店に達していたという[iii]。コロール・ラインの服は、47年のデビュー当時は非常に高価なディオール・ブランドのオート・クチュール・ドレスとして、それを注文し着用できる女性は限られていた。アメリカで「ニュー・ルック」として紹介され1年も経たない間に、彼の服はニューヨークの百貨店でも売られ、他のデザイナーによってそのシルエットはコピーされ、さらにそれを別の生産業者がアレンジし、もはやディオールの「コロール・ライン」ではなく、「ニュー・ルック」の服として安い値段で庶民も購入できるまでに広まっていった[iv]。実際、アメリカの庶民向けの通信販売社シアーズ＝ローバックのカタログにも図3、4のように「ニュー・ルック」の服が掲載されている。ディオール店で売られたドレスは1着500ドルは下らなかったといわれているが、ここでは5ドル程度で販売されている。

コピーの増幅は止まらず、ディオールのラベルの盗難やそのラベルを別の服に付け替えて販売するなどの詐欺行為もあったという。ディオール店では、コピー防止対策を講じていたようだが効果は薄かったようだ。一方、どうせコピーされるならばと、製造業者にディオールのデザインの型紙を販売して手数料を取る業務も始めている[v]。悪質なコピー業者も存在したようで、デザイン画を店の内部者から買い、それを転売することを商売にした組織もあったという。パリの高級オート・クチュールが標的にされ、ディオール店もそれに含まれた[vi]。

大量の服を生産し世界中で販売したディオールだが、はたしてデザインは一人で行っていたのだろうか。彼の自伝では次のように語られる。「急に稲光のようにデッサンがショックを与える。私は神経を集中する。それをテーマにいろんなヴァリエーションを考え、翌朝、別のシルエットが私に合図をする。（中略）少しずつデッサンははっきりして来て、インスピレーションを固定させるのに必要な新しいデザインとなる。シルエットがはっきりとして、流行を押し出す大砲のようになってきて、初めて私は手を休める。しばらくの間は何もしない。この幕間の後で、もう一度見直すと間違いが少ない。私は自分で描いたデッサンを始めのうちの漠然と描いたものから、終わりになってずっとしっか

図3　シアーズ＝ローバック社通信販売カタログ、婦人既製服販売のページ（1953年）

図4　シアーズ＝ローバック社通信販売カタログ、ティーン向けドレスと女児服（1952，53）

りしたものまで全部を見直す。……それから2、3日の間にデッサンを数百枚描く。考えは次から次へと浮かぶ。一枚のデッサンは一つの事をテーマにしたヴァリエーションを次から次へと思い起こさせる。」[vii] 実際にディオールは年間2500枚のデザイン画を完成させたといわれる。そのためのデッサンを2、3日部屋に籠っては描き、部屋中が紙でいっぱいになるほどだったという。

また彼は、前述のデザイン画盗用に対して細心の注意を払っていたとも語っている。「店内でも衣裳を持ち運びする時、コートに隠したり、白い布をかぶせて見えないようにしている。デッサンには全部番号を打つ。コレクションの一般の傾向を表すトワールや、衣裳は発表の日まで注意深くしまっている。スタジオには僅かの変化が起こっても、すぐに布地や、帽子や、刺繍をしまえるようにカーテンが用意してある。」[viii]

このように、弟子に描かせていたというような記述はなく、むしろデッサンの鬼と化して昼夜もなくデザインに取り組んだ姿勢が覗える。彼は自身のデザインに大変誇りを持ち、上顧客のリクエストでも考えを曲げることはなかったという。

4．本研究資料の1950年のデザイン画作品群について

4－1．資料の概要

本研究の資料であるデザイン画は、77点からなる作品群で、大部分は縦65センチ×横50センチの大きさの紙に描かれている。しかし全点が全く同じ大きさではなく、最も大きい用紙は縦65.3センチ×横50.2センチ、小さいものは縦63.7センチ×横49.2センチと多少の違いがある。使用されている画材は、鉛筆と水彩絵具とみられる。

これらは4群に分類されてそれぞれ表紙がつけられている。表2に4群それぞれに含まれる枚数を示した。1～3群目の表紙には“Esquisse Silhuoettes 1950 Christian Dior”（1950年のシルエットの下絵）と、加えてそれぞれ“Eté”（夏）、“Eté-Plage”（夏の浜辺）、“Automne”（秋）と書かれおり、4群目は全く何も書かれていない表紙が付けられている（図5）。よってデ

表2　1950年のデザイン画資料

表紙	枚数
Eté	17
Eté-Plage	25
Automne	15
無記入	20
計	77

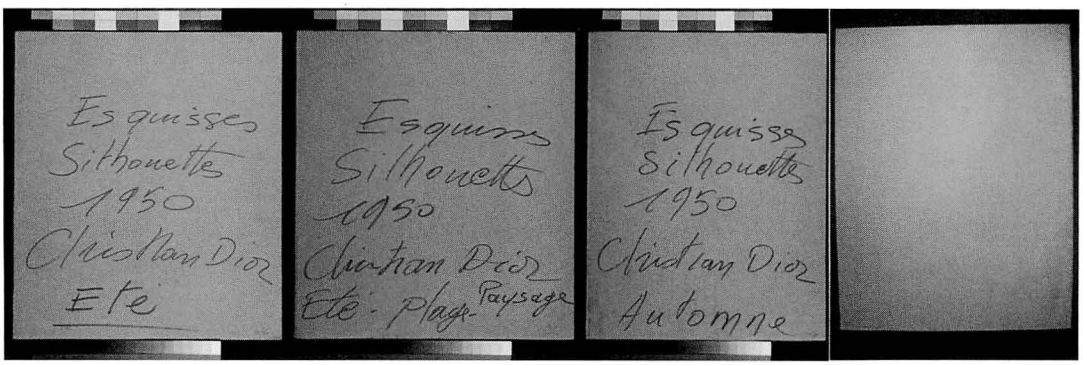

図5　4つのグループに分けて付けられた表紙

図6　<左>本資料のデザイン画、1950年
　　<右>1950年のコレクションのスーツ

ィオールの1950年の夏～初秋にかけてのデザインであると考えられるが、1950年の春夏コレクションのテーマは「ヴァーティカル（垂直）・ライン」、秋冬コレクションは「オブリーク（斜線）・ライン」で、いずれも直線的なシルエットのデザインであった。しかし、この資料のデザインは全て、コロール・ラインに典型の、ウェストを細く絞りたっぷりとスカートが広がったシルエットが描かれている（図6）。つまりコレクション用のデザイン画ではなかったと考えられる。また、ディオールの自伝によれば、「デザイナーの仕事で変なことの一つに、流行がいつも季節外に決定されるということである。冬のコレクションはリラや桜の季節に出来るし、夏のコレクションは落葉の時、又は初雪の時に出来るのだ。（中略）夏は真冬に恋しく、冬は真夏に懐かしい。夏に夏の衣裳を作ることは一つのコレクションから離れた全く新しい衣裳を作るのと同様、私には不可能である。」[ix] とのことから、前年の冬に描かれたものといえる。

また、これらのデザイン画の裏には、“SPECIMEN”の文字や、何らかの意味をもつと思われる番号とみられる数字や記号“F”や“Bi”などが書かれていた。番号や記号は全てのデザイン画に付されているわけではなく、番号は通し番号ではなかった。

4－2．デザイン画に描かれる衣服

77枚のデザイン画について、下絵、そこに描かれた衣服、使用された色の一覧を表3に示す。この資料のデザイン画の描写は（図7）、ワンピースやブラウスとスカートの組合せなどの何種類かのスタイルの下絵をあらかじめ描き、それと白紙を鉛筆で塗りつぶした紙に重ねて線をなぞり転写する方法で、同じ下絵を何枚も転写してから後に着色している。よって、衣服の形の構想のためのデザイン画ではなく、模様と色の構想のためのデザイン画であることが分かる。帽子から靴まで全身着色されたものもあれば、スカートのみが着色されたものなどまちまちである。49点がワンピース・スタイル、26点がブラウスやジャケットなどのトップスとスカートの組合せ、5点はスカートのみが着色されていた。トップスのみが着色されているものはなかった。また、モデルの人体部分が着色されていないものも多く、靴が描かれていないものもあった。よって、全点に共通して着色されている部分はスカートのみである。

服の形の共通点は、前述のように全点が「コロール・ライン」のシルエットであること、つまり、トップスは、襟や袖の形が各々異なるが、体にぴったりとしたラインであり、ウェストがきちんとマークされ細く絞られ、膝下までの長

図7　<左>転写した鉛筆の線
　　<右>スカートのみが着色されたデザイン画

表3　1950年デザイン画資料に描かれた内容

	表紙	下絵	帽子	トップスのタイプ	スカートの模様	ワンピースのタイプ・模様	小物	靴の色・タイプ	使用色							色数
1	Eté	k		広襟ノースリーブ	海			黒・パンプス			白	青系	緑	黄	朱	5
2	Eté	g				長袖シャツタイプ・海	ベルト・黒	黒・編み上げサンダル			白	青系	緑	黄	朱	5
3	Eté	g			幾何学					黒	白	青系			朱	4
4	Eté	e		ドロップスリーブ	幾何学			黒・ハイヒール	灰	黒				黄	朱	4
5	Eté	a	白・広つば	長袖シャツ	海			白・ウェッジソール(星マーク)		黒	白					2
6	Eté	a			幾何学			水色・ウェッジソール(星マーク)		黒		青系		黄		3
7	Eté	b				サンドレス・星				黒	白	青系				3
8	Eté	b				サンドレス・幾何学	手袋・同柄			黒	白				紫	3
9	Eté	b				ノースリーブ・蔦				黒				金	ワイン	3
10	Eté	b				ノースリーブ・幾何学			灰	黒	白	青系		黄	朱	6
11	Eté	b				サンドレス・縞							緑		ワイン	2
12	Eté	f				サンドレス・幾何学			灰	黒	白	青系	緑	黄	ピンク	7
13	Eté	p		ノースリーブ	幾何学				灰	黒				黄		3
14	Eté	h		ノースリーブ	チェック			黒・フラット	灰	黒	白				茶	4
15	Eté	c				ノースリーブ・幾何学				黒	白	青系				3
16	Eté	b				ノースリーブ・幾何学				黒	白	青系		薄黄		4
17	Eté	d				フリルスリーブ・葉							緑		濃ピンク	2
18	Eté-Plage	c		半袖	幾何学			黒・ハイヒール		黒			緑	黄	ピンク	4
19	Eté-Plage	e				フレンチスリーブ・リボン		黒・ハイヒール	灰		白	青系				3
20	Eté-Plage	e				半袖・リボン		黒・ハイヒール		黒	白	青系				3
21	Eté-Plage	e		半袖	花					黒	白		緑		朱	4
22	Eté-Plage	e				フレンチスリーブ・大花		白・フラット	灰	黒	白				赤	4
23	Eté-Plage	a	灰・広つば			長袖シャツタイプ・花		オレンジ・ウェッジソール(星マーク)	灰	黒	白				オレンジ	4
24	Eté-Plage	a		長袖シャツ	リボン			白・ウェッジソール(星マーク)		黒	白					2
25	Eté-Plage	a		長袖シャツ	チューリップ			緑・ウェッジソール(星マーク)		黒	白		緑	黄	赤	5
26	Eté-Plage	h	黒・広つば			フレンチスリーブ・花		黒・ハイヒール		黒	白				朱	3
27	Eté-Plage	i		半袖シャツ	縞			黒・編み上げサンダル		黒	白	青系				3
28	Eté-Plage	i				フリルスリーブ・花		黒・編み上げサンダル		黒	白			金	赤	4
29	Eté-Plage	h		フレンチスリーブ	星月太陽					黒	白			黄		3
30	Eté-Plage	q	黄・広つば	ジャケット?	太陽					黒	白		緑	黄	紫	5
31	Eté-Plage	b				フレンチスリーブ・花、太陽	手袋・同柄				白	青系				2
32	Eté-Plage	c				フレンチスリーブ・花				黒	白	青系	緑	黄	オレンジ	6
33	Eté-Plage	c				ノースリーブ・音符、鍵盤				黒	白				赤	3
34	Eté-Plage	m	ボンネット			広襟ノースリーブ・花		黒・ハイヒール	灰	黒	白				濃ピンク	4
35	Eté-Plage	l	白・広つば			広襟ノースリーブ・花	手袋・黒	黒・ハイヒール	灰	黒	白				濃ピンク	4
36	Eté-Plage	a				半袖・花、メキシカン		白・ウェッジソール(星マーク)			白	青系	緑	黄	朱	5
37	Eté-Plage	a		長袖シャツ	花			白・ウェッジソール(星マーク)			白	青系	緑	黄	朱	5
38	Eté-Plage	a		長袖シャツ	蔦			白・ウェッジソール(星マーク)			白	青系	緑	黄	朱	5
39	Eté-Plage	j	白・広つば			七分袖・花蔦	手袋・同柄	白・ウェッジソール		黒	白	青系	緑	黄	朱	6
40	Eté-Plage	o	ボンネット			七分袖・花蔦	手袋・同柄	白・ハイヒール		黒	白	青系	緑	黄	朱	6
41	Eté-Plage	l	白・広つば			広襟ノースリーブ・オランダ風	手袋・同柄	白・ハイヒール		黒	白	青系	緑	黄	朱	6
42	Eté-Plage	n	白・広つば			フレンチスリーブ・オランダ風	手袋・白	白・ハイヒール		黒	白					2
43	Automne	b				ホルターネック・縞				黒	白	青系			濃ピンク	4
44	Automne	b				ホルターネック・縞、鍵盤				黒	白					2
45	Automne	b				ノースリーブ・幾何学	手袋・同柄		灰	黒	白	青系		薄黄	朱	6
46	Automne	b				ノースリーブ・幾何学				黒	白			黄	オレンジ	4
47	Automne	f		ジャケット	幾何学					黒	白	青系			朱	4
48	Automne	d				フレンチスリーブ・縞		ハイヒール			白	青系				2
49	Automne	d				フレンチスリーブ・古代風		ハイヒール		黒	白	青系				3
50	Automne	d				フレンチスリーブ・ボタン		ハイヒール				青系			濃ピンク	2
51	Automne	h		ジャケット		幾何学タイル		フラット・サンダル			白	青系			濃ピンク	3
52	Automne	h		フレンチスリーブ	葉			フラット・サンダル	灰			青系	緑	黄		4
53	Automne	h			幾何学				灰	黒				黄	朱	4
54	Automne	c				フレンチスリーブ・ダイヤ			灰	黒	白				朱	4
55	Automne	o	ボンネット			七分袖・格子、リボン		黒・ハイヒール		黒	白					2
56	Automne	k		ノースリーブ	縞			黒・フラット		黒	白					2
57	Automne	r				ノースリーブ・格子		黒・ハイヒール			白	青系		黄		3
58	—	a		長袖シャツ	海			赤・ウェッジソール(星マーク)			白	青系		黄	朱	4
59	—	a		長袖シャツ	海		ベルト・黒			黒	白	青系	緑	黄	朱	6
60	—	a			海					黒	白	青系	緑	黄	朱	6
61	—	f				サンドレス・海				黒	白	青系	緑	黄	朱	6
62	—	b				ノースリーブ・幾何学				黒	白		緑			3
63	—	b				ノースリーブ・幾何学				黒	白	青系			朱	4
64	—	f		ジャケット	幾何学、リボン					黒	白	青系			朱	4
65	—	f		ブラウス	ショートパンツ	サンドレス・幾何学、リボン	水着・同柄			黒	白	青系			朱	4
66	—	f				サンドレス・星、月、太陽、海				黒	白				ピンク	3
67	—	b		ベスト		サンドレス・砂、波?					白	青系			茶	3
68	—	b				サンドレス・葉、蔦					白	青系				2
69	—	h			花ジャカード風					黒		青系		薄黄	茶	4
70	—	g	白・広つば	長袖シャツ	帆船			白ブルー・ウェッジソール(星マーク)		黒	白	青系				3
71	—	e		フレンチスリーブ	ドレープ			黒・ハイヒール	灰	黒	白				ピンク	4
72	—	g	薄黄・広つば	長袖シャツ	サンゴ			白黒・ウェッジソール		黒	白	青系	緑	黄	朱	6
73	—	e				フリルスリーブ・チューリップ		黒・ハイヒール		黒	白	青系	緑	黄	濃ピンク	6
74	—	j				広襟・葉、蔦、実	手袋・同柄	白・ハイヒール			白	青系	緑	黄	朱	5
75	—	m	白・広つば			七分袖・葉、蔦、実	手袋・同柄	同柄・ウェッジソール			白	青系	緑	黄	朱	5
76	—	k				広襟・田園		黒・フラット		黒	白		緑	黄	朱	5
77	—	n	白・広つば			フレンチスリーブ・縞、ボタン	手袋・黒	黒・ハイヒール		黒	白					2
	着色点数		15	26	29	49	14	42	15	58	66	44	26	36	53	

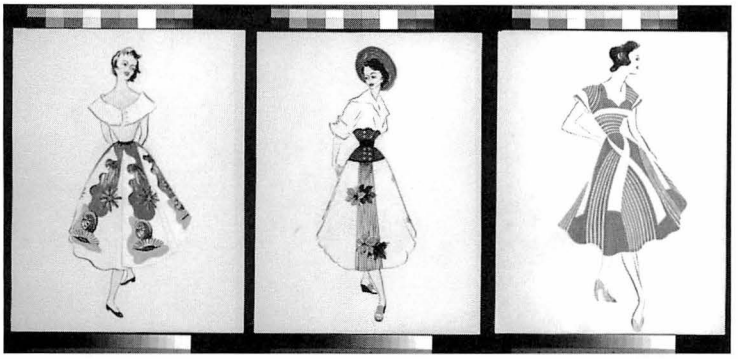

図8　本資料にみる様々な表情のコロール・ライン

図9　同じ色遣いで似た模様を検討したデザイン画

さのたっぷりとしたフレアースカートという点である（図8）。

77点全点に、非常に細かい描写でスカートの模様のデザインが行われていた。そのデザインは、同じ色遣いやテーマ、モチーフで何種類か描いて検討したことが覗える（図9、10、11）。一方、トップスは同じものをいくつものデザイン画に描いてあることが多く、模様が描かれていないもの、着色されていないものもあった。スカートの描写の丁寧さに比べて他の部分の描

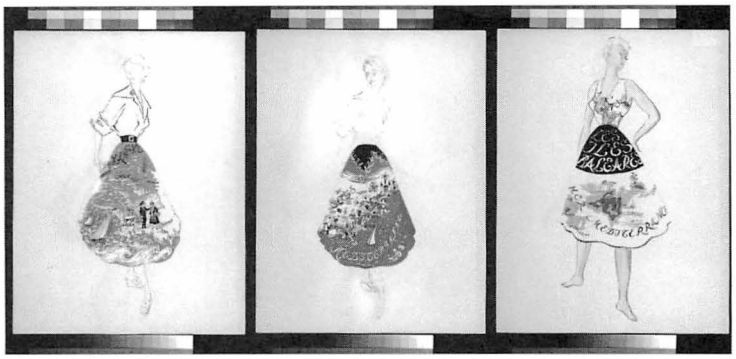

図10　同じテーマの模様を数種描いたデザイン画

図11　同じモチーフで異種の服を検討したデザイン画

図12　スカート部分は別紙を切り貼りしてある

写が粗雑な印象を受ける。また、厚紙に描いた模様をスカートの形に切り、別の薄手の紙に描いた下絵に貼ったものもある（図12）。これは、模様を先にデザインし、それをスカートの形にしたときにどう見えるかを検証したものであると考えられる。これらのことから、このデザイン画の作品群は、スカートのデザインを検討したものであると考えられる。

4－3．デザイン画の下絵の種類

前述したようにデザイン画の描写方法は、始めに下絵を転写してそれに着色を行っている。この下絵に着目すると、もととなる下絵が何種類か使われていることが分かる。同じ下絵が使われているデザイン画をグループ化し、表3のように、それぞれa～rと記号を付し分類してみると、18種類あることが分かった。多く使われている下絵（図13）はbの15点、aの11点で、続いてhの7点、fの6点、それ以外は4点以下であった。各下絵を比較してみると、モデルの顔の表情の表現が少しずつ違って見え、手足など細かい部分の描写に技術のバラつきがみられる。しかし、衣服は全て非常に細かく丁寧に、高度な技術によって描かれている。ディオールの自伝を訳し、本人とも交流のあった上田安子によれば、ディオールのデザイン画の特徴は「非常に単純化された線であるが、デザインの持つ特徴を的確に表し、しかもフランス的でエレガン

図13　下絵の種類　左上b、右上a、左下h、右下f

図14　ディオールが描いたデザイン画／出典<左>参考文献(4)　<右>参考文献(2)

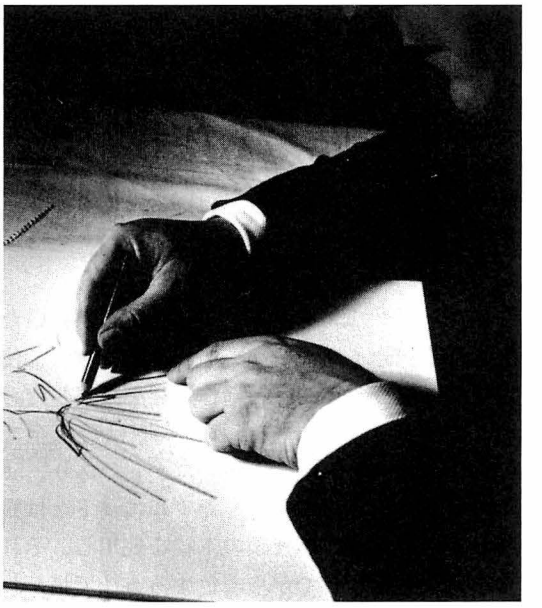

図15　デザイン画を描くクリスチャン・ディオール／出典，参考文献(2)

トなニュアンスをもっている。」[x] ということである（図14、15）。ここに描かれたモデルは非常にバランスが良く、最低限の線で的確に表現されている。

4－4．色彩について

ディオールのデザインはそのシルエット同様、色彩もまた、変化に富んだものであったとされる。「色とは素晴らしいもので極めて魅惑的だが、慎重に扱わなければならない」とはディオールの言葉であるが、本資料を色彩に着目してみてみると、カラフルに見えて実は色数は抑え、まさに慎重に選んだ調和する色同士の組合せで構成されていることが分かる。表3の色のデータを元にまとめた、使用された色相の一覧表（表4）を見ると、白、黒、灰の無彩色が多く使われていることに気付く。白を使用したデザイン画は66点、黒は58点、灰は15点であった。夏ものであるから涼しげな印象を与える白が多く使われたことは想像するに易しいが、意外にも黒が多く使われている。それ以外には、青系44点、黄36点、朱・赤32点、緑26点などが主に使われた色で、他にピンク、ワイン・紫、茶、オレンジなどが使われている。一枚のデザイン画の中で使われている色数（表5）は、4色の組合

表4　使用された色相

色相	使用回数
白	66
黒	58
青系	44
黄	36
朱・赤	32
緑	26
灰	15
ピンク	11
ワイン・紫	4
茶	3
オレンジ	3

表5　使用された色数

色数	デザイン画数
4色	23
3色	19
2色	13
6色	11
5色	10
7色	1
1色	0

せが最も多く、次いで3色、2色、平均すると3.8色であった。比較的少ない色数でデザインされている。7色の組合せは1つのみであった。少ない色数で、その組み合わせの妙により魅力的な配色が行われているといえる。

5．まとめ

1950年にクリスチャン・ディオールが描いたとされるデザイン画について、下絵、衣服、使用された色などを調査し創作過程を考察した。

このデザイン画に描かれた衣服は77点全て「コロール・ライン」のシルエットであり、50年のコレクションで発表したシルエットとは異なるものである。18種類の下絵を使用し、それらを何枚も転写してから着色する方法で描かれた。スカート以外の衣服については着色されていないものも多数あり、スカートについては全てが丁寧に着色されていることから、スカートの模様と色の検討のためのデザイン画であると考えられる。色彩に着目してみてみると、カラフルな印象を受けるが色数は抑えてあり、慎重に選んだ調和する色同士の組合せで構成されていることが分かった。

ディオールはコレクション前にはデザイン画を大量に描き、アイデアも次々と湧いてきた、と自伝で述べていることから、デザインは弟子ではなく自身が行っていたとみられるが、一方で、デザインの盗用やデザイン画の転売といった被害もあったようで、本人が描いたものであるかどうかを確定するのはなかなか難しい。しかし下絵のモデルの描写は表現技術にばらつきがみられるものの、スカートの模様は非常に細かい描写で高度な技術によって描かれているといえ、絵の才能に長けた人物によるものということは言える。

《参考文献》

(1) “The New Look～The Dior Revolution～” Nigel Cawthorne, 1996, Hamlyn an imprint of Reed Comsumer Books Limited, London
(2) “Dior —Christian Dior 1905-1957—”, Françoise Giroud, Editions du Regard, 1987
(3)『クリスチャン・ディオール』マリー＝フランス・ポシュナ著，高橋洋一訳，講談社，1997
(4) 新版『一流デザイナーになるまで』クリスチャン・ディオール著，上田安子・穴山昂子訳，牧歌社，2008

《引用》

i　参考文献(3)pp.376
ii　ibid.pp.307
iii　ibid.pp.313
iv　ibid.pp.295
v　ibid.pp.314
vi　参考文献(4)pp.86
vii　ibid.pp.87
viii　ibid.pp.161
ix　ibid.